



中部の

エネルギーを 築いた

人々

東邦電力の東京進出を陣頭指揮した
進藤甲兵

進藤甲兵は松永安左工門の電気事業を支え、松永四天王の1人に数えられた人物である。進藤は、明治17年10月、山梨県北巨摩郡小淵沢村に進藤利貞の次男として生まれた。実家は裕福な肥料商であったが、使用人の不正から家業は次第に傾いた。明治39年7月に中央大学法律科を卒業した。当初政治家を志していたが、卒業後は方向を転じて、同年9月東京電灯に入社した。倉庫課に配属された進藤は在庫管理を担当、在庫量を3分の1まで減らす合理化を進めて上司を驚かせた。しかし明治42年9月、考えが合わず、東京電灯を辞し、その後両国橋駅の駅夫(日給38銭)等を勤めた。



進藤甲兵

九州電気・九州電灯鉄道、松永安左工門に仕える

明治42年秋、福沢桃介は名古屋の電気事業進出に際し、名古屋電灯の内容調査を行うため、適任者を東京電灯の知人に照会した。このとき推薦されたのが駅夫をしていた進藤であった。そ

のときの仕事ぶりが評価されて、明治43年6月、進藤は名古屋電灯の調査課長に迎えられた。同年9月、福沢桃介や松永安左工門が



松永安左工門



九州電灯鉄道本社(出典『九州地方電気事業史』)

関わって九州電気が設立されると、進藤は同社調査課長として転任(同年12月)し、松永のもとで働くことになった。同社は、明治45年6月、博多電灯軌道と合併して九州電灯鉄道となるが、進藤は佐賀支店営業部長に

就任、大正2年には本社監査課長として事業統合問題の処理にあたった。大正6年に長崎支店長、同8年に本社の営業課長を歴任した。営業課長時代には、熊本県下の電灯値下げ問題に取り組んだ。

岐阜電力常務、七宗発電所の建設

大正11年6月、九州電灯鉄道と関西電気(名古屋電灯の後身)が合併して東邦電力が発足すると、進藤は理事に就任した。また同じ月に設立された岐阜電力の常務取締役役に就任し、飛騨川の水力開発の責任者となった。最初に取り組んだ七宗発電所は、堰堤にローリングダム(可動堰)を設置するなど最新技術を導入した発電所であったが、関東大震災により主要機器を廃棄した芝浦製作所が被災し、3回におよぶ竣工延期願を提出し、さらに通水試験中に導水管の破損事故を起こすなど難題が続出した。この間、大正13年3月から9月まで、電気事業研究のため米国ストーン・エンド・ウェ



七宗発電所(岐阜電力建設)

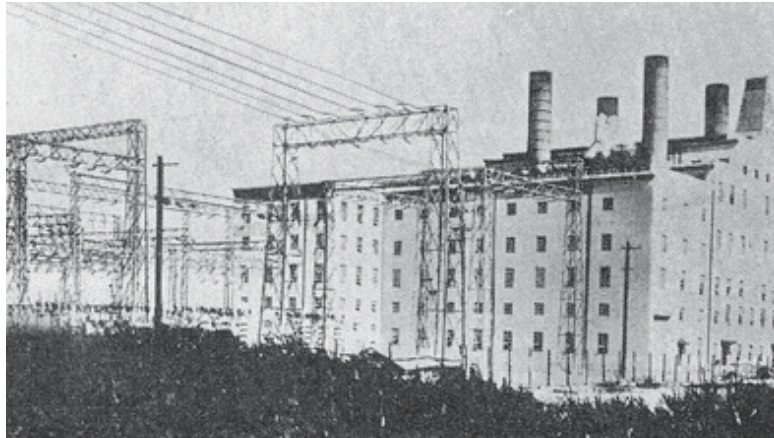
ブスター会社で約半年、公共事業の中央管理組織等について調査研究を行っている。進藤は工事完成(大正14年11月)前の大正11年3月、新たな任務を得て同社常務を辞している。

東京電力常務、東京電灯との電力戦

当時東邦電力では、関東大震災後の首都の電力状況を見て東京進出を計画し、大正14年3月、東京電力を設立した。進藤は抜擢されて常務取締役となり、東京進出の陣頭指揮を取った。同社は、横浜・川崎の一部を供給区域とする東京湾電気を設立(大正15年5月)、静岡電力を合併(大正15年10月)

し、さらに寸又川水力電気(後の大井川電力)を傘下に収め(大正14年3月)、横浜鶴見に東京火力発電所(7万kW、大正15年11月1号機運転開始)を建設するなど積極経営を展開した。大正15年5月には東京府下南葛飾、北豊島、南足立3郡の電力供給許可(50馬力以上)を得た後、南葛飾、江東方面の工場地

帯を舞台に、低料金、無休送電等を武器として電力史に残る需要家争奪戦を繰り広げた。その活躍振りは、「松永直参の進藤あり」として天下にその名を知らしめた。進藤にとっては、自由に手腕を発揮できた得意の時代であった。東京方面にお



昭和初期の東京火力発電所(東京電力建設)

る大口供給は7万8000kWに及ぶなど、同社は目覚ましい進出を遂げて東京電灯の心胆

を寒からしめたが、共倒れを懸念した金融界の仲介で、昭和3年4月、両社は合併した。

関西区域駐在常務 従量料金制の導入

昭和3年5月、進藤は東邦電力に復帰して関西区域駐在(名古屋支店を含む)の常務取締役となった。4年10ヵ月の在任の間に、進藤は名古屋市内に4つの営業所を設け、名古屋市との料金値下げ交渉の衝にあたり、電灯料金にメートル法(従量制)を導入した。昭和8年3月には、関西駐在を離れ、関連会社を管

理する関連事業部門を職掌した。米国遊学で研鑽を積んだホールディング・カンパニーの研究を実地に生かす仕事であった。昭和11年に東邦電力の取締役を下り、昭和17年1月、59歳で逝去している。進藤は、統帥の才に長け、また部下に慕われる情に厚い人物であった。(浅野 伸一)



東邦電力名古屋支店



進藤の米国調査報告
 (『電華』大正13年10月)